NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 8
2004. 4. 30

・事務局長のページ「芽吹きを花と実に」
・報告ーパイロットコーポレーションポスター原画応急修理
・保存修復の現場から「こだわりの道具紹介①ー竹べらー」
・増澤理事　黄綬褒章授章を祝う
・書籍紹介『写真資料の保存』
・JCP 事務局通信

芽吹きを花と実に

新しい試みとして「月例交流会イベント」を始めました。初回の二月末には東京文化財研究所の西浦忠輝さんを招き「世界の文化遺産の保護と日本の役割」でお話し頂き、日曜午後というのに新宿文化センターに約30人が来て下さいました。タイ、カンボジア、シリア、パキスタン、アフガニスタンでの保存修復活動を映像を通して現場ツアーに参加したような気分になり、わが国のトップレベルの修復エキスパートが国際舞台でどう貢献しているのか知ることができました。

三月末には元朝日新聞カメラマンで、フリージャーナリストの一方、大英博物館特別研究員でもある後藤和夫さんに「写真考古学 歴史写真は人類の遺産」の題で、二十年間にわたる「古い写真」の発掘話をVTRの映像とともに語って頂きました。ドイツ訪問の帰途、フィリピン沖で撃沈されたイ号潜水艦のドキュメントアルバムから始まり、オランダライデン大学で見つかった幕末写真、大英博所蔵のガウランド撮影の天皇陵内部や収集品の写真など、苦労と運で集めた史料価値の高い一枚一枚に、大井町駅前の品川区のホール会議室に「花金」の夜参加された方たちには楽しんで頂けたようです。

継続していくうちに常連層が定着し、そこから輪が広がっていく感触を得ました。会員以外の方々にはNPOとしての活動を知っていただく場にもなるわけです。

さて、修復事業としては次の事例をあげることができます。

茨城県美浦村の埋蔵文化財保存センターにある、かつて川岸屋旅館にあった縄文模様が描かれた壁画の修復には、大林賢太郎、増田久美、中右恵理子、奈良真一の皆さんが現地に泊り込んでの作業でした。裏打ちを取替え、展示のための額装で甦り、完成した新センターの壁面に近く飾られます。（ニュースレターNo.7 参照）

万年筆の㈱パイロットコーポレーションから依頼された、創業以来の宣伝ポスターの原画の応急修理には、青木享起さん、三浦功美子さんの二人が当たり、油絵1枚と水彩画10枚の修復に一ヶ月近くかかりました。水彩ポスターの修復には平塚の工場まで出向き、剥落止めに専念しました。万年筆の素材や性能開発の歴史や製造工程を知り、興味深いものがありました。

山梨県都留市にあるミュージアム都留の収蔵品の古文書中心のデータシートづくりは、山梨緊急地域雇用創出特別基金事業という、ちょっと変わった取り組みでした。雇用対策の資金の一部が県教委を通じで市教委に割り振られたのです。地元のハローワークを通じて応募してきた人たちの中から、小生と八木三香さんが面接して男女合わせて四人を選び、甲州資料調査会の西村慎太郎さんをリーダーに、半年間館の文化財台帳をコンピューター入力し、未整理の収蔵品調査も行いました。

東電 電気の史料館にある「葆光」（ほのかな光の意）との創業者・福澤桃介の遺墨の扁額に対するコンディション調査は三浦さんが担当、本格修理が必要との結論で、今後の取り組みを検討中です。

横須賀市人文自然博物館所蔵の国指定重要有形民俗文化財のカモイ船を、フランスのブレスト市で開かれる帆船フェスティバルに出品するにあたっての事前調査には、当会理事でもと元興寺文化財研究所の増澤文武さんに担当していただき、調査報告を作成しました。

茶話会も不定期ですが、四ツ谷のオフィスで開きました。第一回は、「紙について語りませんか？」会員の常連の方々を中心に修復の現況と問題点、対策について突っ込んだ論議が交わされました。第二回は和紙修復のエキスパート増田勝彦さんを招き、チェコの水浸被害図書の修復支援のお話を伺い、真空凍結乾燥法を中心に多くの質疑応答で盛り上がりました。四月末に三度目を開きます。

こうして振り返ってみますと、ひとつひとつは小振りながら、内容は堅実で質が高く、NPO活動としての芽吹きを感じます。今後、具体的な活動の量と質を高める継続的努力で、花と美に結びつけて行きたいと考えています。

特定非営利活動法人　文化財保存支援機構

理事／事務局長　谷　久光

報告

㈱パイロットコーポレーション

ポスター原画応急修理

歴史を語る企業の資料

三浦功美子（ＮＰＯ文化財保存支援機構　専属スタッフ）

2003年1月に、ＮＰＯ文化財保存支援機構は㈱パイロットコーポレーション資料室担当者の方より収蔵品の保存管理に関して相談を受けた。コンディション調査の結果、2003年秋に㈱パイロットコーポレーションの収蔵しているポスターの原画11点の修復処置を行った。

パイロット平塚工場にある資料室には、パイロット創業85年間にわたる様々なおびただしい数の企業資料が収蔵されている。貴重な万年筆のコレクションを始めとして、書籍や文書、漆工芸品、写真、フィルムなどなど。

現担当者が資料室に赴任した時、これら貴重な資料を出来る限り手当をして、後進に残したいという思いを持たれたそうだ。担当者2名が貴重な万年筆のデータベース化を懸命に進めていた。資料のデータ化とともに、様々な所蔵品の保存管理をどのようにしていこうかと、いろいろ工夫して、努力されていた。その中で戦前から戦後にかけてのポスター原画が痛々しい状態のため、東京国立博物館に相談をした結果、NPO文化財保存支援機構を紹介されたというわけである。

まずはコンディション調査ということで、2003年4月、大林賢太郎副理事長が現場に赴いた。

調査したポスター原画は全部で11点。一番古いものは大正13年、戦前から戦後にかけてのパイロット万年筆のポスター原画作品だった。11点中、1点はキャンバス地に描かれた油絵、9点は紙にポスターカラーのような不透明水彩で描かれ、残り1点はシルクスクリーン版画。ポスターの大きさも様々で、大きいものは約110×80cm、一番小さいもので約55×40cm。

ポスターの絵は、当時発売された万年筆がリアルに描かれ、背景には、戦闘機が飛んでいたり、船艦と日章旗があったり、鶴、富士山や桜と……。キャッチコピーも「紀元二千六百年」「愛国第一線」などなど。日本のイメージや時代を反映したデザインである。その中の6点のポスターについては、リアルに描き込まれた万年筆が実は別の紙に描かれ、その形に切り取って背景の上に貼ってあった。描かれた背景の上に切り取った万年筆を載せ、ベストな位置を決めていたのだろう。中には剥がして少しずれた所に貼り直していた跡が見られた。

状態も様々だった。その中の数点は、絵具の剥離剥落が進んでいて、作品を動かすと絵具がパラパラと取れてしまいそうな危険な状態だった。画面にテープが付いていてそこの場所が褐色に変色しているものもあった。また以前に大きな修理が行われていた。この修理以前のポスターの状態も酷かったらしく、破れていたり、折り曲げられてクシャクシャになっていた形跡がある。そのため以前の修理では、その損傷の所に補強のために大きな紙がベタ貼りされ、その上に裏打ち(※)がされていた。しかも、裏打紙はすでに斑点が出ていたり、画用紙のようなものであったりと紙自体質が悪く、補強紙としてあててある紙も、厚くて画面上に影響が出ているものもあり良い修理だったとはいえない。しかも時代的なこともあり、ポスターの紙自体が粗悪なものもあり、紙自体が劣化していて、茶褐色になっているものもあった。

※裏打ち：絵が紙や絹に描かれている場合に、それだけでは脆弱で保持することが難しいとき、補強のため裏面より別の紙を貼ること。補強用の紙に糊をつけて貼ることを裏打ちという。

かなり大雑把な感じの修理ではあるが、一応ポスターの補強にはなっていたので、修理以後ポスター自体の大きな欠損は免れていた感はある。

とはいっても、展示した時の画鋲を刺した穴があったり、数種類のテープが裏面に貼ってあり、シールも貼ってありと、ポスターという性格からか、保存を重視した管理ではなかったようだ。収納は、ポスター作品の間に薄様紙を1枚挟み、重ねてキャビネット(マップケース)に保管されていた。この収納方法だと、取り出す時ポスターを直接持って引き出すことになるので、ポスター同士が擦れたり、折れ曲りの誘因になると想像され、また今後の劣化や損傷の危険性があった。マップケースが置いてある場所も外気の影響をもろに受けやすいところだった。

昭和13年
「無敵日本 パイロット高級萬年筆」

昭和15年
「紀元二千六百年」

以上のようなコンディション調査を踏まえて、石井さんといろいろとご相談した。今の段階では、ポスターを移動させたり展示のために使用することは考えていないということだった。まずは保存収蔵するのに、ポスターの損傷をこれ以上進行させないこと、損傷による劣化・破損の危険性を軽減することを主にした処置を行うことになった。その結果、危険性が一番高い絵具の剥落止め、劣化していくテープの除去などを重点的に処置を行うことになり、本格的な修理(裏打紙を除去するなどの大手術)は行わなかった。

今回の事例では、資料室の環境や保管方法など、総合的にアドバイスを行った方がよいとの判断をした。まずは、ポスターを1点毎収納する中性紙のフォルダー（包み紙）を作った。そして、2003年10～11

資料室全景

月にかけての10日間、NPOスタッフの私こと三浦功美子が応急処置に出向いた。油絵のポスターについては、普通油絵は木枠に張られているのだが、他の紙のポスターと同様な裏打ちの修理が行われていて、木枠に張られていなかった。絵が波打ちのように暴れて、絵具層もさざ波のように浮いていた。そのため、横浜に油彩画修復の工房を構える青木享起氏にお任せすることにした。

作業日誌

10月20日　作業初日

朝5時30分起床。7時前に家を出る。

事務局の八木さんと平塚駅南口改札口に朝8時30分に待ち合わせ。そこからバス。しかし初日からトラブル発生。乗るバスを間違えた。バスを乗り換え、ようやくパイロット平塚工場に到着。

資料室は工場の門を入り右手にある。昭和20年代に建てられたという木造平屋建て。風通しはよいが、地面から床面まで10cm程度。外壁も木造なので外気の影響を受けやすく、寒い時期は底冷えするとのこと。作業をしていて納得。ファンヒーターをお借りした。

まず、作業場となる場所の確認。資料室の一角を使わせて頂く。壁には万年筆のコレクションを収納している棚がズラーッと並んでいた。前もってお願いしていた、ポスターが2枚広げて置ける作業台と手元を照らしてくれるスタンドライトが用意されていた。作業台はグレイのオフィス用の大きなデスクが、向かい合わせに4脚並んでいた。2脚のデスクにはポスター2枚を置き、他のデスクはフォルダーを置いてポスターの出し入れが出来るような使い方をすることにした。作業の手順を考えながらライトのセッティング、先に郵送していた道具を取り出し、持ってきた道具を広げての準備など。その道具ごと移動できるようにワゴンをお借りした。準備完了。

そして、10点のポスターをマップケースから取り出し、1点毎に寸法、状態などを調査し、写真等の記録を採った。

10月23日　作業2日目

事務局の八木さんと平塚駅南口改札口に朝8時30分に待ち合わせ。バス停で「このバスは総合公園に行くか？」と確認をしたうえで乗る。

八木さんは、㈱パイロットコーポレーション　中村専務にNPO文化財保存支援機構についてと今回の応急処置について淡々と説明をしていた。後で聞いたらかなり緊張したらしい。

私はこの日から処置作業に入る。作業台の上に、吸い取り紙、次にポリエステル紙を敷き、その上にポスターを置いた。ポスターの処置は2枚同時に進行していく手順にした。剥落止めの処置は、絵具を固着するまでの時間が必要なので、その間はもう1枚のポスターの処置をする。作業台の回りをくるくると回りながらの処置となる。

この日は、ポスターに付着していたテープと接着剤の除去を中心に行った。

午後に青木享起さんが、油絵の1点を預かって行った。

10月27～29日　作業3～5日目

朝7時20分頃、東京駅から始発の東海道本線に乗る。最初、朝7時台それも始発だからと、余裕で座れると高をくくっていた。それは大間違いだった。サラリーマンで席はグレイの色に埋まっていた。道具類を詰め込んだ重いリュックを床に置き、運がよければ川崎駅で座れる。

作業中日（なかび）に差し掛かる頃、少々の不安がよぎり始めた。

絵具の剥落止め。ポスターの大半は見た様子だと絵具に亀裂が入っているので、絵具層の浮き上がりがかなりあるのではないかと思っていた。そして、剥落止めは一番浮き上がりの多いポスターから始めた。絵具の亀裂が入っている怪しい箇所を取れそうかチェックしていく。針や細いヘラなどでつつきながら絵具の破片となって動くか確認をしていく。絵具層の浮き上がっている部分は大体かたまっているので、2～3個止めては重しを置き、乾かして接着する。その間離れた箇所の剥落止めを行いまた戻る、といった行きつ戻りつの作業である。

修理の模様は、パイロットコーポレーションの社内報『Tell us』に掲載された

1枚の処置が終わったと思っても、後に確認すると、また別の箇所に浮きが出ていることがある。1枚に掛かる時間が当初の予定よりも長い。

予定の日数で終わるか少々不安になってきた。この状態がポスター全部だったらとどうしようかと不安に駆られながら作業を進めていったが、あとの半分くらいは亀裂はあるが思ったより浮いてはいなかったので、ホッとした。ポスターの状態もかなりのばらつきがある。

昼食は工場の食堂。食堂は天井がやたらと高く体育館のような雰囲気。学校にいる雰囲気があり、とても懐かしい感じがした。そして天気がよければ目の前の総合公園を散歩。何本かの桜が狂い咲きしていた。1時から午後の仕事開始。

予定通りには処置は進まず、日程の半分は終了。

11月10～13日　作業6～9日目

平塚に通うのが半ばを過ぎた頃、ようやく電車のコツもつかめてきた。端の車両だと少々余裕があり、東京駅から座れた。作業台の回りをくるくる回ることも慣れてきて、作業も軌道に乗り出した。ポスターの状態もかなりのばらつきがあり、時間を掛けずに終了するものも出てきた。順調に進む。

作業の合間に、担当者の2名からパイロットの万年筆についていろいろとお聞きした。ポスターに描かれている万年筆は当時のニューモデルで、何年製造のこのシリーズで、このような特徴がある、などなどを伺いながら、当時のその万年筆本体を見せて頂いた。また、実際ポスターはもっと作られていたが、戦時中にかなりのパイロットの資料が失われてしまい、現在ポスター原画についてはこの11点だけしか会社には残っていないとのこと。万年筆とその関係する資料がともに、その会社に収蔵されていることは、パイロットの歴史を後進に伝えていくうえでも重要であり、貴重な事だと感じた。

作業中には、何度かの見学があった。パイロットの社内会報誌の取材や他の部署の方が来られ、ポスターの状態や修理内容の説明などをした。万年筆の修理を行っている方が来られた時はなかなか楽しかった。ポスターの修理についての話もさることながら、私が使っている道具に興味津々で、素材や使い方などかなりの質問が飛んできた。

11月14日　作業最終日

朝5時30分起床。7時前に家を出る。東京駅から座る。平塚駅まで1時間。資料室に8時50分に到着。まだ終わっていないポスターの処置を行う。そして10点すべての最終チェック。その頃最終日の確認のため八木さんも来た。

八木さんと共に、工場の見学をさせて頂いた。工場内の機械からボールペンのキャップが次から次へ吐き出されていたり、金属板が徐々に万年筆のペン先になっていったりと。小さい頃の遠足で行った工場見学を思い出し懐かしい気持ちになった。工場内を回りながら石井さんの説明を聞いていると、やはり最終チェックや繊細な部分は人の手と目だなと再認識をした。そして今回の見学のメインである蒔絵万年筆の製作室へ。あの万年筆の筒状の小さい空間に、漆の沢山の技法を凝らした蒔絵の世界が広がってあるのには驚嘆。八木さんと2人

で溜め息をついていた。それも同じ図柄を数十本作っていくわけで、職人のすごさと素晴らしさを感じた。蒔絵万年筆の値段を聞いてびっくり。2人して思わず、「安い！……でも買えない」。 また、私の方は思わず「その使っている道具は何ですか？」訊ねていた。

担当者に、ポスターを1点毎お見せしながら今回の処置について説明を行い、確認をして頂いた。

10日間の応急処置は無事完了。

担当者2名の方には、10日間の作業中大変お気遣いを頂きました。心地よく作業が進めることが出来ました。とても感謝しております。本当にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

作業中の筆者

修理報告書の概要

主な処置内容である。ポスター1点毎状態は異なるので、処置内容も同じではない。その中の一例の概要を挙げた。

修理前の状態

以前の処置で本紙の折れ筋箇所等に厚く太い補強紙が貼られ、裏打ちがされていた。

盛り上げになっている部分の絵具層が剥落剥離して危険な状態であった。

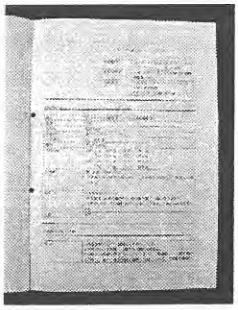
貼り付けてある万年筆の紙が部分的に剥がれて浮いていた。

裏面の3辺にテープと、1枚のシールが貼られていた。

修理方針

今回の処置は全体修理（本格修理）ではない。あくまでも収納保存していく中で、作品の損傷をこれ以上進行させないこと、損傷による劣化 破損の危険性を軽減することを主眼とし、本紙になるべく負担がかからない範囲の処置を行う。修復作業前の作品の状態調査に基づき、損傷などの危険性がある部分を重点的に処置を行う。

修復処置



①調査、記録

②絵具の剥落止め

絵具層の剥離している箇所に、板膠と布海苔の混合水溶液を差して、支持体の紙と絵具層の接着を行った。

③万年筆の紙の接着

本紙に貼り付けてある万年筆の紙の剥がれた箇所を、セルロース系接着剤のメチルセルロースで接着を行った。

④付着物の除去

画面や裏面に付着しているテープ、シールを、本紙に変色や劣化を引き起こす可能性があるので除去した。

⑤収納

保存収納のため、作品1点毎の中性紙フォルダーを作成して、そこに納めた。

⑥報告書の作成

所　見

今回の処置により、絵具層の剥落の危険性は軽減された。しかし、本紙と裏打ち紙は酸化傾向にあり、劣化はゆるやかではあるが進行している状態である。今後、定期的に作品の状態の点検を行う必要はある。

劣化の進行は、保存環境を整えることによってある程度抑えられる。温湿度の急激な変化に気を付け、湿気がこもらないように、また害虫を呼び込まないような対策を講じて行く。

具体的には室内の各所に温湿度計を設置し、年間を通して測定値を取り、変化が少ないところに作品を置くよう気を配る。

ポスターを収納しているマップケースに調湿紙を敷いたり、調湿材を入れるなどして湿度の変化を最小限にとどめる。

また防虫対策としては、室内各所に簡単な捕虫具を置いたり、空気の出入りのあるところにメッシュを張るなどということも効果が期待できる。

防虫剤に関しては、作品に影響を及ぼすものもあるので、専門家のアドバイスを仰ぐことをお勧めする。

なお、今後貸し出しのための移動や、展示等が発生するのであれば、全体修理を行い、酸性化傾向にある裏打紙を剥がすことをお勧めする。新規に裏打ちを行うかは、その時点で本紙の状態を再確認した上で処置方法を検討する必要がある。

保存修復の現場から

（レポーター：三浦功美子　文責：八木三香）

「こだわりの道具紹介①ー竹べらー」

「文化財の修復に使う道具って、どんなものがあるの？」「こんな便利な道具があることを知ってますか？」「ここが私の一工夫」「使うなら、絶対これ」

野球選手ならバットやグローブに、料理人なら包丁に……どんな職業でもプロにはプロならではの、道具に対する思い入れ、こだわりがあると思います。昨今ホームセンターに行けばなんでも手に入ると思っているアナタ。プロは違うんです。仕上げにこだわればこだわるほど、使う道具は日々工夫を重ね、手に合ったものを追求してこそ技は生きます。修復技術者ともなれば尚更のこと。そう、弘法は筆を選ぶのです。

保存修復の現場を紹介するこのシリーズでは、新たに技術者こだわりの材料／道具を紹介していきます。

これを読んでいる技術者のあなたも、こんな発見をみんなに教えてあげたい、こうすればもっと使いやすくなる……など情報をお持ちでしたら、是非教えてください。

竹の種類にもいろいろあります

一口に「へら」と言ってもいろいろありますよね。最初は、表装技術で用いられる竹べらをご紹介します。今回こだわりの「へら」を紹介してくださるのは、練馬区在住の表具師　佐藤隆明さんです。

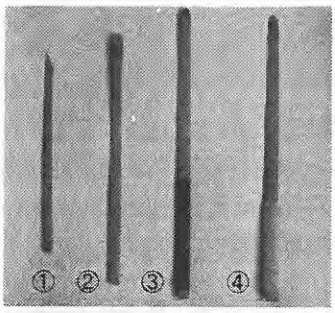
表装技術において、竹べらは必須のアイテムです。紙折に使ったり、間剥ぎ（※1）をしたり、喰い先（※2）を作ったり、裏打ち紙を捲ったり、仮張りを剥がしたり……あらゆる場面で活躍します。そのため、新人にはまず最初に竹を渡し、自分で削って竹べらを作るところから教える工房も多いようです。

竹の種類も孟宗竹と篠竹（しのたけ）では性格が違い、伐採する時期によっても変わってくるそうです。

「竹を伐るのは11月～12月。竹が地中の水分をあまり吸い上げなくなり、水分が涸れてきて竹の肌が白っぽく見える時期がいい。春先になると人間と同じで肌が荒れてくる。3月に入ると今度は虫が入ってくる」

なーるほど、知ってました？

「伐った竹を半月ほど涸らし、その後軒下で乾燥させる。あんまり出しっぱなしにしておくと黒い斑が入ってしまうよ。」



ヘラも用途に応じて幅7、8㎜～2㎝くらいのものまで、さまざまに工夫して作ります。
左から、①篠竹（幅7㎜）紙の上のチリを除去するときなどに使用する。②篠竹（幅10㎜）紙を相ヘギにするときなどに活躍。③④孟宗竹（幅20㎜）紙折、仮張りから本紙を剥がす際など幅広く使用

竹にも色々な厚みがあります。
左から①篠竹　②関東産の孟宗竹　③関西産の孟宗竹

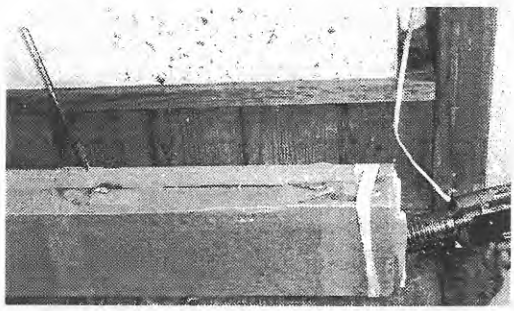
そうして涸らした竹をヘラの大きさに分割し、ボディと先端を削ります。先端の形も用途によって様々です。カーブの丸み、先端の角度などは、使いつつ自分に合った角度を見つけていきましょう。

竹に「焼き」を入れる

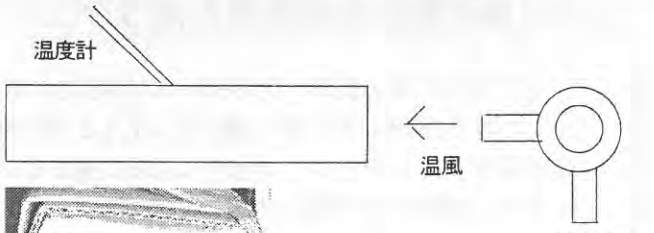
さて、ここからが佐藤さんのこだわりです。固く締まった材質を得るため、ここで竹に「焼き」を入れるのです。筆者は知り合いの技術者何人かに聞いてみましたが、ここまでやっている人はいませんでした。

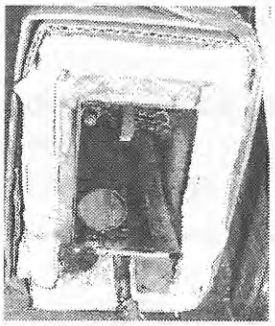
「焼き」を入れる装置も佐藤さんお手製。写真と図を参照してください。鉄板を長く四角い筒状に組んだところへドライヤーで温風を送り、内部の温度を180℃まで上昇させます。中には直径3㎝程の金属製の筒が仕込んであり、温風を循環させる仕組みになっています。180℃になったところへ削った竹を入れ、3分間。これ以上入れておくと、高温のため竹が焦げてしまうそうです。

こうして取り出された孟宗竹は、全身にしっとり油を浮かべ、さながら風呂上りの風情です。これに対し、油分の少ない篠竹は、さっぱりした顔をしています。しかし手で触れると、持てないくらいの熱さです。竹が熱いうちは成形に耐えるので、先端を裏側に向けて微妙に角度を付けます。そうしておいて裏を紙ヤスリに平らに当て、削ります。ヘラにとって命は表皮面のエナメル質です。このなめらかな肌合いが、本紙を傷めず裏打ちを剥がしたり、チリを取ったりと繊細な仕事を可能にしてくれます。ですから表皮側にはなるべく手を加えず、裏側をヤスリで磨ることによって加工するのです。すると先端はまるで刃物を研いだように、薄く鋭く仕上がります。この鋭さが紙を剥ぐときの最大の武器になるのですが、そのくせ刃物と違い、表面が滑らかなので紙を傷めることがないのです。自然の命をそのまま理想の道具へと変身させるなんて、日本人の智恵は素晴らしいですね。

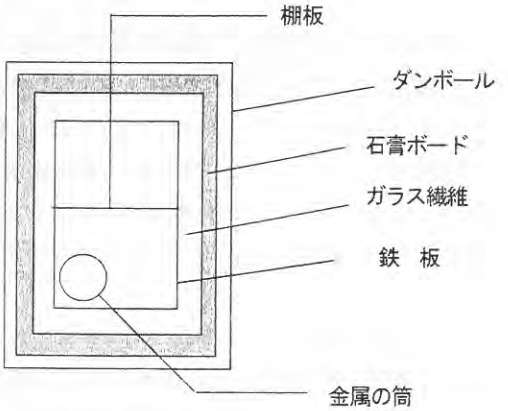


焼き入れ装置





内部の様子
左下に金属の筒が見える。
中段に棚板があり、この上に竹を載せる



佐藤さんはよく剣道の竹刀を素材として使うそうです。竹刀の原

※1 **間剥ぎ**：1枚に漉かれた和紙を剥いで、2枚にすること。
※2 **喰い裂き**：紙をちぎって繊維を毛羽立たせること。

料は関西産の孟宗竹が多く、肉厚で、またよく枯らせてあるところもヘラの材料としては理想的なのだそうです。
こうした工夫はどこから生まれるのでしょうか？
実は佐藤さんの趣味は釣り。釣竿まで自分で作ってしまうほどの凝り方です。若い頃は100分の1㎜の狂いが見えたという佐藤さん。「他人が作ったものなら自分でも作れて当たり前」とおっしゃいます。180℃3分という「焼き入れ」のレシピも、実は釣竿を作る際の要領で、アメリカの釣り雑誌から得た情報だそうです。趣味の知識が仕事の上にも生かされて、これだけの展開を見せているのです。

いかがでしょうか？ 修復工房入社〇年目のあなた。先輩にもらったヘラをそのまま使ってるなんてことありませんか？ 技術の第1歩はまず自分でやってみること。まずは、竹を探すところから始めてみましょう。

※このコーナーに関するご意見、ご質問などございましたら、巻末事務局内編集部宛お送りください。
ヘラやその他修復材料に関する情報もお待ちしています。また、修復材料・道具について取り上げてほしいものがございましたら同編集部宛お寄せください。皆様の声をお待ちしています。

使用する道具

左上からナイロン糸（滑り止めに手元を巻く）、ペンチ（竹を曲げるのに使用）、紙ヤスリ（400番ぐらい）

佐藤隆明さんプロフィール
- 昭和21年　東京生まれ
- 昭和36年～43年湯島中村豊春堂にて修行
- 昭和43年練馬区石神井公園にて開業
- 昭和60年練馬区高野台に移り、現在に至る

増澤理事の黄綬褒章受章を祝う

平成15年11月、秋の褒章(※)受賞者853人が発表されましたが、その中で当会の理事　増澤文武さんが黄綬褒章を受章されましたのでご報告いたします。増沢さんは、もと(財)元興寺文化財研究所　保存科学センター長を経て理事。現在は同研究所名誉研究員でもあります。当機構には設立後まもなく理事として参加してくださり、評議員としても活躍して頂いています。埋蔵文化財や民俗資料などの相談ごとには骨身を惜しまず対応してくださり、当機構にとっては大変頼もしい大先輩です。

その増沢さんが今回黄綬褒章を受章されたというのは、地味な分野ながらこつこつと歩み続け、築き上げてこられた業績が評価されたものに他なりません。えてして縁の下の力持ちに終わる保存修復の分野の人たちにとっても、大きな励みとなるできごとでした。ここに改めて紹介し、お祝いとさせて頂きます。

黄綬褒章の栄誉に浴して　　増澤文武

本件が公となると同時に三輪理事長からお祝いのお手紙を頂き、本機構からは大層な祝電を賜り、また有志の方々からお祝いやご祝辞を賜りましたことに対して心からお礼申し上げます。

黄綬褒章についてのお話を頂きました時は本当に驚きました。実を申しますと私自身は叙勲褒章ということは全く別世界のことと夢想だにしていませんでしたので、慌てて広辞苑を繰った次第です。

平成15年秋の文部科学省関係の黄綬褒章受賞者は6人で、文化財保存修理業務に関しては、岡本正志氏(71歳)茅葺師、関根孝吉氏（80歳）手漉和紙製作技術者、和田時男氏(72歳)人形浄瑠璃文楽小道具製作修理技術者（72歳）の年齢的にも仕事の面でも、長ぜられたお三方と共に、末席に小生を加えて頂きました。年齢のみならず、技術面でも若輩の感は免れません。歴史を誇る伝統技術のみならず、自然科学的分野が要求される昨今、実際の事業遂行にあたり、僭越ですがなにがしかの貢献が出来たのだろうか？ そして、やっと修理技術者の「修」位のところに辿りついたことを評価して頂いたのだろうか？ などと思っています。この微力な小生が受賞できましたのは、(財)元興寺文化財研究所創立者、辻村泰圓大和上をはじめとして苦労を共にしてきたメンバーと、文化財関係機関、研究者、業者の多くの方々のご支援の賜物、ただただ深謝するのみです。

今後ともご鞭撻賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

黄綬褒章　増沢文武さん

埋蔵文化財の出土遺物や民俗文化財の保存処理に携わって約30年。考古学に科学を持ち込んだ草分け的存在で、全国でも珍しい民間の文化財研究所でありながら保存科学の分野を確立してきた。

受章には「保存科学という新しい分野が認められたことになり、非常にうれしい」と笑顔を見せる。

大手塗料会社を経て、元興寺文化財研究所(奈良市)に入所した昭和47年は、公共機関による発掘調査が本格的に始められたばかり。田中角栄の列島改造論で全国が開発ラッシュとなり、頻繁に行われた発掘調査で大量に出土した木製品や鉄製品の保存が急務となった。

奈良文化財研究所や大学などで研究は進められていたが、実践では未知の分野。薬剤の種類、濃度、浸透させる時間など、持ち込まれる遺物の大きさや形状で異なる処理に頭を悩ませた。

印象に残るのは、重要有形民俗文化財の赤穂市の製塩用具の保存処理。長年、塩にさらされてきた道具はさびと乾燥でボロボロ。鉄と木という異なる材料でできているため、薬剤の使用方法も難しい。何度も断ったが、文化庁の担当者の熱意に根負けして引き受けた。しかし、これが同研究所が民俗文化財の保存処理で不動の地位を築くきっかけとなった。

その後も、大阪府の三ツ塚古墳から出土した八メートル以上に及ぶ木製の大型そり「修羅」の保存処理、X線を用いて島根県岡田山一号墳から出蘇した円頭太刀から「額田部臣」の文字を発見するなど着実に実績を上げてきた。

今では、発掘調査の現場で保存処理は当たり前のように行われ、科学を駆使した調査による世紀の発見が連日のように紙面を賑わす。「それでもまだ50年ほどの歴史しかない。錆の塊からどんな発見があるかわからない。保存科学は価値を明らかにする仕事」と後輩たちにエールを送る。

＜2003年11月2日　奈良新聞記事より＞

用語解説

※褒章：奇特行為者を表彰するために栄典として授与する褒賞の記章。褒賞の種類には次のようなものがあります。

・紅綬褒章；自己の危難を顧みず人名の救助に尽力した方を対象とする。
・緑綬褒章；社会奉仕活動に従事し、顕著な事績のある個人等を対象とする緑綬褒章、
・黄綬褒章；その道一筋に業務に精励し、衆民の規範である方を対象とする。
・紫綬褒章；学術、芸術、技術開発等の功労者を対象とする。
・藍綬褒章；教育、医療、社会福祉、産業振興等の分野で公衆の利益を興した者又は保護司、民生・児童委員、調停委員等の事務に尽力した方を対象とする。
・紺綬褒章；公益のため資材を寄付した方を対象とする。

これらについては、毎年春は4月29日に、秋は11月3日に、春秋叙勲と同日付で授与されています。

書籍紹介

幅広い写真の知識も得られる写真保存のための待望の書

『写真資料の保存』

荒井宏子、河野純一、高橋則英、吉田 成・著　日本図書館協会資料保存委員会 編集企画

社団法人 日本図書館協会 発行・2003年11月20日発行・定価：2,000円＋税

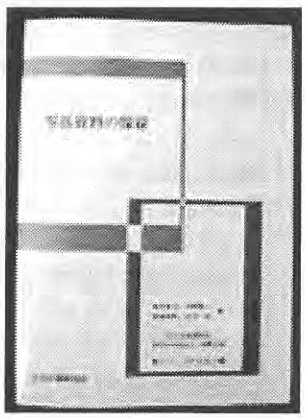
あとがきに「本書が国内で写真資料の保存に関する唯一の解説書となることでしょう」と述べられているが、写真の様々な分野に関わる人たちがそれぞれの経験や知識をもとに論じた労作である。

「19世紀の初めの写真術の発明以来、撮影され保存されてきた写真は、時間空間を越えて歴史を検証できる人類のかけがえのない映像による記録であり、保護され永く伝承されるべきものだろう」という冒頭の言葉に保存に対する思いが凝縮されている。

本書は写真の保存を考える場合、まず歴史や技法の変遷を理解すべきである、という立場に立って、第2章で写真方式の変遷・識別について述べ、ついで第3章で写真の劣化について記述している。劣化については材料自身、現像処理、保存環境の3つに分け、様々な種類の劣化の過程を説明する。

そして第4章でいよいよ保存方法について論ずるのだが、写真の劣化の進行は絵画よりもかなり早いものと予測され、劣化を遅らせるには保存環境の適正化、保存容器の選択など写真収納条件を整えることに尽きるとしている。

ところで、写真の保存と写真の展示は、実は相反する立場にある。光を照射することなく暗所に収納するのが、写真の保存にとってもっともいいのだが、展示はまさにそれとは正反対の環境に写真を置くのである。写真の画調を損なわずに、しかも劣化を防止する立場から適正な光を照射し、展示するにはどうすればいいか、照度レベルや温度、光源などについて第5章で具体的に触れ、次章では、写真乾板、写真フィルム、写真印画など写真画像を保存するための環境について分かりやすく教えてくれる。



また、写真の保護と修復を考える上で重要なことは「した方がよいこと」と「しない方がよいこと」を理解しておくことだという。かつて、写真の保存・修復の専門家の仕事は、劣化した写真を“化学的に修復”することにあったが、化学処理が一時的に劣化した写真をよみがえらせることができても、あとに取り返しのつかないダメージを与える場合があることが分かってきた。今は“物理的保護”が主流であるといい、その方法を写真や図をまじえて解説している。

一方、視点を換えて、複写の意義と役割や複写の方法、さらに9章では、最近急速に普及したデジタル画像についての長所・短所や疑問点、問題点などについても言及している。いずれにしろ、写真の保存研究はまだ始まったばかりで日が浅く、現在も研究途上であることを知ることができる。

そして、本書は単なる保存・修復のことに限らず、私たち読者に幅広い分野の写真の知識を伝えてくれる。

（浜名　純）

ＪＣＰからのお知らせ

平成16年度文化財保存支援機構 総会報告会／交流会のお知らせ

□日　時：2004年6月13日（日）16:00～17:30
□会　場：奈良大学A棟4階大会議室
（〒631-8502 奈良市山陵町1500）
□交通アクセス：近鉄京都線 高の原駅下車 徒歩20分／または、高の原駅から奈良交通バス「奈良大学」「学園前駅」行きにて、「奈良大学」下車
□対　象：文化財保存支援機構 会員（非会員でも可）
□内容：全国に散らばるJCPの会員はなかなか顔をあわせる機会がありません。会員の多くが所属する文化財保存修復学会大会の場を借りて、会員相互の交流を図ると共に、JCPの平成15年度の事業／会計報告、平成16年度の事業計画、基本方針などを説明いたします。皆様のご意見も聞かせていただき、より実りの多い運営に結び付けたいと思います。積極的なご参加をお待ちしております。

※学会大会に参加するには会費が掛かりますが、当会交流会のみの参加は無料です。

平成16年度5月例会予定

「文化財のカルテを作ろう」
ー調査時における文化財の取り扱いと記録のとり方ー

□日時：5月29日（土）午後1時半より午後5時まで
□講師：半田正博氏（東北芸術工科大学 美術史・文化財保存修復学科教授）
□会場：三栄町社会教育会館（〒160-0008 新宿区三栄町25番地）
TEL：03-3341-1024
□参加費：会員；4,000円　非会員；5,000円
□内容：保存／修復専門家と文化財との関係は、医者と患者の関係と同じです。正確な処置、将来の治療のためにも、健康診断を受けた患者ひとりひとりのカルテ作りは欠かせません。
カルテにはどのような情報が必要なのか、調査時の文化財の取り扱い方は……など、まずは紙や絹に描かれた文化財を取り上げ、より良いカルテ作りを考えていきます。
□定員：30名
※お申込み・お問合せはTEL/FAX：03-5363-4533、あるいはE-mail：jimukyoku@jcpnpo.orgまで。
①氏名 ②連絡先住所、電話番号 ③会員／非会員 ④参加人数をお知らせください。

ご寄附をありがとうございました。

・三浦定俊様　・西村慎太郎様
・㈱修美　・㈱文化財保存　・他法人1社 個人2名

ご入会ありがとうございました。

（平成16年4月30日現在入会者数）

□理事　6名　　□運営会員　14名
□登録会員　111名　　□一般会員　110名
□賛助会員　19件

(株) 宇佐美松鶴堂
(株) 岡墨光堂
(財) 元興寺文化財研究所
京都造形芸術大学
歴史遺産研究センター
(有)坂田墨珠堂
(株) 修美
宗教法人 正法院
昭和不動産
靖斎文化財保存研究所
日本通運株式会社美術品事業部
羽生 卓史
(株) 半田九清堂
百元 節
フレンドトラベル
文化財保存
溝川商店
他個人3名
（アイウエオ順・敬称略）

NPO JCPの活動に参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費 7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で，文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費 5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費 一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
・講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL:www.jcpnpo.org
※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用下さい。
・郵便振替　00120-4-10545 NPO JCP
・UFJ銀行 四ツ谷支店 普通預金 3960340

NPO JCP NEWS
第8号
2004年4月30日発行
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
〒160-0008
新宿区三栄町6番地 小椋ビル403号
TEL/FAX：03-5363-4533
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org

〈理　事〉
三輪 嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長）
増澤 文武
白井 久明
伊原 惠司
谷 久光（事務局長）
〈編集協力〉浜名 純（牧童舎）・嶋根 隆一
〈事務局〉谷 久光（事務局長）・八木 三香（総務部長）
松本 洋子・三浦功美子